

〔研究ノート〕

国家統合推進下のブラジル・リオグランデドスル州における 「国民意識」と「地域意識」の接合に関する議論の考察

渡会 環(TAMAKI WATARAI)

上智大学大学院

はじめに

「ブラジルは、見かけの調和のもとに、矛盾した一世界を創造してきた」(Skidmore 1999:xiii.)¹⁾。これは、米国人ブラジル研究者スキッドモア(Thomas E. Skidmore)が、近著の冒頭で述べている言葉である。

多民族多文化社会でありながら、ブラジルでは独立以来、ネーション(Brasil-Nação)の確立が模索されてきた。それは、国内の民族的、文化的多様性とネーションの間に「調和」を図り、矛盾した一世界を創造することを不可欠としてきたのである。

従来のナショナリズム関連の研究では「創造」という表現が多く用いられてきたが、本稿ではナショナリズムを発展段階別に捉え、「ブラジル」が文化や歴史を共有した共同体として知識人に「想像」される段階、すなわちイデオロギーの段階に焦点をあてる²⁾。そして、その想像の

レベルでしか存在しえない「調和」の一世界について考察を試みたい。

本稿では、これまで日本、欧米において研究が僅少であったリオグランデドスル州を、ブラジルにおける多様性とネーションの関係を捉えるための事例として取上げる。1930年代に独裁者ヴァルガス(Getúlio Vargas)が同州から輩出したことで、同州に関する研究は政治的なものに集中してきた。筆者の知る限りではあるが、同州の社会構造がよくまとめられ日本語で読めるものとして挙げられるのは、1963年にサンパウロ人文科学研究会から出版された『南リオ・グランデの社会と産業』の一冊しかない。

しかし、リオグランデドスル州が事例として興味深いのは、「真正なブラジルの存在」を導き出すのに、ある意味で役立っているといえるからである。同州は「ブラジル連邦の異質部」、「ブラジルとは異なる一地域」等といわれ、ブラジルにおいて特異な存在として捉えられてきた³⁾。ところが、同州を「異質なもの」とみな

プログラムへと変化させられ、政治ナショナリズムへと展開すると説明する(Hutchinson 1985)。

³⁾ 「ブラジルとは異なる一地域 (Um pedaço diferente de Brasil)」という表現は、ブラジル南部に関する地理の教科書 *A hora do Sul: o Brasil em regiões.*(Arbex Jr., José and Nelson Bacic Olic, eds. 1995. São Paulo: Editora Moderna.)の第1章のタイトルであった。この教科書は、1996年に、

¹⁾ 傍点は筆者による。

²⁾ ラウエルアス・ジュニオール(Ludwig Lauerhass Júnior)はナショナリズムを3段階で捉え、イデオロギーとして発生したナショナリズムが制度化を経たのち、民衆レベルにおいて展開されると述べている(Lauerhass Júnior 1986)。ハッチンソン(John Hutchinson)はナショナリズムを、文化ナショナリズムと政治ナショナリズムに区別し、歴史主義的なイデオロギーを公式化する歴史家や芸術家によって比較的小さな規模で始まった文化ナショナリズムが、ジャーナリストや政治家によって具体的な政治的、経済的、社会的

すことによって、「真正な」ブラジルの存在が成立し、この存在に対する知識人の信仰こそ、ブラジルのナショナリズムを支えてきたものなのである⁴⁾。筆者は「異質」とされる同州をも含めて、より多面的に「ブラジル」を捉え直す必要があると考える。

存在の絶対視は、多様性の側からも「ブラジル」を想像させるなど、「ブラジリダーデ (brasili-dade)」⁵⁾と多様性の関係を単に対立ではなく、錯綜としたものにしてきた。「ブラジル」は、あらゆる角度から働きかけられる対象である⁶⁾。そこで本稿では、国家統合推進下におけるリオグランデスル州での「国民意識」と「地域意識」の接合に関して行われた議論に注目したい。同州における国民意識と地域意識の問題に関しては、リオグランデスル連邦大学人類学教授であるオリヴェン (Ruben George Oliven) や同大学歴史学教授のグツフレインド (Ieda Gutfreind) を初めとして、数々の先行研究がある。本稿はそれらの先行研究を参照し、また多く引用しているが、本稿の強い関心としてあるのは、両意識の「接合」という行為が可能であったその背景であり、その一因はブラジルのナショナリ

リオグランデスル州ポルトアレグレにあるリオグランデスル・カトリック大学で、一年生の必修科目である地理の授業で実際に使用されていたものである。

⁴⁾ ブラジル人社会学者オルティス (Renato Ortiz) も指摘 (Ortiz 1985)。「真正なブラジルの存在」の絶対視は、それを発掘することを知識人の役割とし、それはときに具体的な表象、オランダ (Sérgio Buarque de Holanda) が 1936 年に『ブラジル人とは何か *Raízes do Brasil*』(『真心と冒険』とする訳本もあり) で述べたような、「真心 (cordialidade)」といったブラジル像となって、表されてきた。しかし、具体的なブラジル像を示さなくとも、彼らにとって外国人であり、リオグランデスル州に留学経験を持つ筆者に対して、「リオグランデスルはブラジルではない」の一言で、「ブラジル」を語るブラジル人も少なくないのである。

⁵⁾ 「ブラジル魂」と訳するのが適切かと思われる。

⁶⁾ レッサー (Jeffrey Lesser) も、国民論、国民文化論が知識人による単なるヘゲモニックな言説であるという従来の見解を否定し、ナショナル・アイデンティティが「交渉」されるプロセスを、ブラジル社会のマイノリティである、中国系、日系、シリア・レバノン系ブラジル人のケースから示している (Lesser 1999)。

ムの特徴にあると考える。

本稿の構成は次のようになっている。まずリオグランデスル州の特異性を再考する。次にナショナリズムの展開を整理し、その中で、「ブラジル」と多様性との間に「調和」が図られるプロセスについて注目する。

1. リオグランデスルの「特異性」

国家統合は、植民地期よりブラジルの抱える深刻な問題の一つであり、独立後も各地域はイギリスなど近代資本主義国の経済と直結し、国内市場は形成されず、地域ごとに完結した社会が形成されていた。

1889 年の帝政から共和政への移行とそれに伴う連邦制の施行は、地域権力をさらに増大させた。ブラジルでは 19 世紀末に既にナショナリズムの萌芽期を迎えていたが、トーレス (Alberto Torres) は、当時の国名の「ブラジル合州国 (Estados Unidos do Brasil)」に異議を唱え、集権化された調整権力の必要性を主張したという (Vianna 1999:39)。

このように、ブラジルでは、地域、すなわち州が、政治、経済、社会などの様々な面において、重要な単位として機能してきた⁷⁾。決してリオグランデスル州だけがブラジルにおいて特異な存在であったわけではない。にもかかわらず、一般的に同州の特異性として、地理的特徴、戦略的位置、植民の過程、経済、ブラジル国史との関係の 5 点が挙げられる⁸⁾。

リオグランデスル州は、ブラジルの最南端に位置し、アルゼンチン、ウルグアイと 1727 キロメートルにもわたる国境を接している地域である。その地政学的な位置から、植民地期より

⁷⁾ 旧共和政期において、「地域」は、地政学的な境界である州と同一視されることとなった (Weinstein 1982:272)。

⁸⁾ この指摘については Oliven 1992 参照。

ポルトガル、スペイン王国間の国境紛争の場となってきた。1494年のトルデシーヤス条約ではスペイン領に属するとされ、スペイン王国の領土としての歴史を有する地域でもある。ポルトガル領に属するようになってからは、ポルトガル領最南端の守り、「フロンティア」として、戦略的な重要性を有してきた。北東部と比べ天然資源が乏しく開発が遅れ、人口が希薄な状態が続いていた同州への入植も、領土防衛と開発の目的の下、進められていく。ブラジル独立後は、ペドロ一世によるドイツ移民の奨励、1875年のイタリア移民の入植開始もあり、多くのヨーロッパ系移民がリオグランデスル州に移住する⁹⁾。

州の産業的な重要性が認識されたのは、ミナスジェライスで金鉱が発見された17世紀末になってからである。鉱山地帯への役畜と食料の供給という重要な役割を、州の牧畜業が担うこととなったのである。1777年にペロータスで導入された、シャルケ(charque)と呼ばれる干し肉産業は、19世紀には地域の主要交易品となる。

州の分離独立をめぐる争いが起きたのも、この干し肉産業に端を発したものであった。中央政府によってラプラタ諸国からの干し肉の輸入税が引き下げられ、リオグランデスル産の競争力が急落すると、州内の不満が増大し、1835年にファラッポスの乱(Revolta dos Farrapos)¹⁰⁾

⁹⁾ しばしば「ブラジルのヨーロッパ」ともいわれるリオグランデスル州であるが、ブラジルのセンサスでは、皮膚の色あるいは人種(cor ou raça)による識別がなされているだけで民族別のデータがないため、ヨーロッパ系移民の子孫の正確な数を把握することは不可能である。また、ヨーロッパ系移民が大量に流入する以前は、干し肉産業の労働力として黒人奴隷が多く使用されていたため、人口に占める黒人の割合も高く、他地域と比べ人種構成の差がそれほど著しいわけではなかった。

¹⁰⁾ リオグランデスル州では一般的に、「反乱」ではなく、「ファロウビーヤ革命(Revolução de Farroupilha)」と呼ばれている。

が勃発する。

ファラッポスの乱の重要性は、この乱がその後、州民のアイデンティティ形成に多大な影響を与えてきたという点である。今日でもリオグランデスル州では、この反乱が想起されるメカニズムが働いている。その一つが、州旗である。中央には聖典、槍と銃剣が描かれ、乱のモットーである自由、平等、博愛(Liberdade, Igualdade, Humanidade)、宣言された独立国名のリオ・グランデ共和国(República Rio-Grandense)と乱の起きた日付である1835年9月20日(20 de Setembro de 1835)が記されている。

また、緑、黄色と赤の3色から構成される州旗は、国旗の色である緑と黄色を革命で流された兵士の血をイメージした赤、ブラジルから分離したリオ・グランデ共和国を示す赤が分けていと説明される¹¹⁾。このような州旗に、我々はリオグランデスル州とブラジルの特殊な関係を見ることができるのである。

こうして、ファラッポスの乱が今日の州民の集合的記憶においても生き生きと甦させられ、ブラジルの統合と分裂の問題が現実性を持つものとして語られる¹²⁾。それが、同州をブラジルにおける特異な存在として際立たせてきたといえる。

さらに特異な存在は、元々はパンパ地方の牧童のことを意味した「ガウーシヨ(gaúcho)」を、牧畜業が栄えたこの地域の住民の呼称として用いることで強調される¹³⁾。リオグランデスル

¹¹⁾ 州旗に関して、*Estudos Rio-Grandenses*. (Freitas, Sebastião Rodrigues de, 1987. Porto Alegre: Editora Sagra), Oliven 1992等を参照したが、既に州民の間でもこのような説明が定着している。

¹²⁾ 今日では、ファロウビーヤの「伝統」は分離独立の手段というよりも、様々な権利を主張する場で用いられることが多い。

¹³⁾ リオグランデスル州自体、内部に民族的、文化的多様性を抱えており、州を単一の文化として捉えることはできない。大学教授、ジャーナリストや芸術家など様々な論者

州は、現在に至るまでブラジリダーデが問われ続けてきた場なのである。

2. ブラジルにおけるナショナリズムの展開

ブラジルにおいてナショナリズムが発生したのは、独立後半世紀以上経過した1880年代であるというのが、研究者間で一致した見解となっている¹⁴⁾。しかし、ナショナリズムが勢いを増すのは、20世紀に入ってからである。

19世紀から20世紀への転換期に登場した、最初のナショナリスト知識人世代は、直接政治に参加することもなく、イデオロギーのレベルでナショナリズムが開花するにとどまった。また、当時「科学的」と称された社会ダーウィニズムやスペンサーの社会進化論の影響により、西欧に対しブラジルを「遅れたもの」と捉え、その原因を熱帯性気候と人種混淆(mestiçagem)に求め、悲観的な国民論を形成したのである。

しかし悲観的に捉えられながらも、人種混淆の結果である「メスティソ(mestiço)¹⁵⁾」の存在は、西欧に対してブラジルの特異性を示すと同時に、「ブラジル人」を定義する上での重要な要

を交え出版された、*Nós, os gaúchos*. (Gonzaga, Sergius and Luís Augusto Fischer, coords. 1992. Porto Alegre: Editora da Universidade.) では、「地理的な宿命論を超えて我々を結び付けているものは何か」、「我々は果たして唯一の共通の精神を持っているのだろうか」を問い、タイトル通り「我々、ガウーショ」を再考している。また、州民のアイデンティティとして「ガウーショ」が形成されていく過程について、*RS: cultura e ideologia*. (Dacanel, José H. and Sergius Gonzaga, orgs. 1980. Porto Alegre: Mercado Aberto.) や *Por baixo do poncho: a contribuição à crítica da cultura gauchesca*. (Golin, Tau. 1987. Porto Alegre: tchê!) などで批判的な考察がなされている。

¹⁴⁾ ペスカテロ 1970、Ortiz 1985、Lauerhass Júnior 1986、アンダーソン 1997、Vianna 1999 等参照。1889年の共和政への移行が、皇帝に代わるネーションの象徴の必要性を増大させ、ナショナリズムを開花させたとする。

¹⁵⁾ スペイン系アメリカ諸国において、「メスティソ(mestiço)」は、先住民と白人の混血児を指すのが一般的だが、ブラジルにおいて「メスティソ(mestiço)」は、様々な人種の混血として広義に解釈されているようである。Ortiz 1985、Vianna 1999 等を参照。本稿では、メスティソを後者の意味で用いている。

素となった¹⁶⁾。その結果、白人、先住民、黒人の融合のうえに形成されたのがブラジルであるという、「3人種の神話(mito das tres raças)」が形成された。

楽観的な国民論への転換は、ブラジル独立100周年にあたる1922年2月に、サンパウロで開催された近代芸術週間(Semana da Arte Moderna)を期に加速する。

近代芸術週間とともにブラジルで幕を開けたモダニズム運動(modernismo)は、「芸術的独立」(Wagley 1979:4)とも称されるように、帝政と旧共和政の下で国家が推進してきた西欧的な文化ではなく、これまで「野蛮」とみなされてきた自国のアフリカ系、先住民文化に注目し、そこにブラジリダーデの真髄を求め、若手の作家や芸術家による運動であった。

同時に、西欧に対するブラジルの芸術的、知的近代化も推進されたが、ロウとシェリング(William Rowe & Vivian Schelling)によれば、ブラジリダーデの追求と矛盾するものではなく、モダニズム運動は、「原始」、「近代」と、一見すると対立する要素の文化的境界の溶解と接合の試みであり、そこに新しい「ナショナルなもの」の創造が求められたのである(Rowe & Schelling 1991:202)。

こうした動きは、詩人・作家であるオズワルド・デ・アンドラーデ(Oswald de Andrade)の『食人宣言 *Manifesto antropofágico*』(1928年)に最もよく表される。彼を含む1920年代の近代主義者は、トゥピナンバ族に食人習慣があると思い描いていた当時の考え方を比喩的に用い、ブラジル文化を様々な文化を消化、吸収したメスティソ的な文化であると捉え、新しいブラジ

¹⁶⁾ 歴史家ロメロ(Silvio Romero)も、メスティソの存在を「それが真実であり、それで十分だ」と述べ、ブラジル人は様々な人種の混血であるという前提から分析を行った(Vianna 1999:46)。

ル文化像を示した。

こうした中登場したのが、ヴァルガスであった。ナショナリズムは、ヴァルガスがクーデターを起こし権威主義体制を樹立した1937年から1945年の新国家体制 (Estado Novo) において高揚期を迎える¹⁷⁾。カーニバルなどが「全ての階級に食される日々の食パン的な文化消費財」(Vianna 1999:11)¹⁸⁾となったのも、この時期である。

ヴァルガスは、労働法の制定、婦人参政権、公教育の実施など国民の福利に積極的に関わっていくことで、国家の制度を通じ、「ブラジル」という想像の共同体を初めて全国レベルで具体化した¹⁹⁾。強力な中央集権の確立を目指すヴァルガスにとって、ナショナリズム政策は必須であった。ときにそれは視覚的な効果——1937年11月には、州旗を燃やし、それらに替わって21の国旗を掲揚したセレモニーを実施——を伴った。

ヴァルガス期には、ブラジルの「再発見者」といわれる、フレイレ (Gilberto Freyre)、オランダ (Sérgio Buarque de Holanda)、ブラード (Caio Prado Jr) らのブラジル論も展開され、特にフレイレの『奴隷主の館と奴隷小屋 *Casa-grande e senzala*』(1933年)は、ブラジル国民論の形成に強い影響を与えた。

¹⁷⁾ ラウエルアス・ジュニオールは、1880-1914年を、「ナショナリズムの覚醒期 (o despertar do nacionalismo)」₁、ヴァルガス期を二つの時期に分け、1930-1937年を「ナショナリズムの支配期 (predomínio nacionalista)」₂、1937-1945年の新国家体制を「ナショナリズムの勝利期 (o triunfo do nacionalismo)」としている。また、大きな変容を遂げつつあったブラジル社会においてヴァルガスが勝利しえた要因を、ナショナリズムの持つ力に求め、同政権をナショナリズムのコンテクストにおいて理解すべきであると述べている (Lauerhass Júnior 1986)。

¹⁸⁾ Cândido, Antônio, *Educação pela noite & outros ensaios*, São Paulo, Ática, 1987, p.198からの引用。

¹⁹⁾ イデオロギーとして発生したナショナリズムを、ヴァルガスが政治レベルで展開したといえる。1930年以前は軍役が国民に課されていたのみであった。

同書は、ブラジル社会の形成においてポルトガル人植民者、先住民、アフリカ系黒人が果たした物質的、精神的役割と、それらの文化的、人種的混淆の結果としての「熱帯ポルトガル文明」の誕生が述べられたものである。特に注目されるのは、フレイレが、それまで病的な存在と捉えられていたアフリカ系黒人を社会形成の中心的要素であるとし、彼らが果たした役割を積極的に評価した点である。

フレイレは主に、奴隷制時代の北東部の日常生活における、奴隷主とその家族とアフリカ系黒人奴隷の文化的、人種的混淆の様子を描くことで、ポルトガル人が持ち込んだ西欧的な文化に熱帯の生活に適したアフリカ系黒人の生活様式や文化が加わり、熱帯ポルトガル文明が形成されていく過程を説明する。メスティソも熱帯に適した新人種の誕生であり、賞賛すべき対象と捉えられた。

フレイレが展開したのは、「調和の一世界」である。そこには、いかなる対立も社会紛争も描かれない。フレイレ自身が「最も普遍的で深刻な対立関係」(Freyre 1933:53)と明記する、奴隷主と奴隷の間もまた例外ではない。オルティス (Renato Ortiz) によれば、フレイレの著作のタイトルにみられる、奴隷主と奴隷、屋敷と掘っ立て小屋²⁰⁾といった対極的な概念の並置は、ブラジルを構成する多様性を示しているに過ぎない (Ortiz 1985:94)。多様性は緊張を孕むものではなく、むしろブラジルの富の要因であるとされ、ブラジル文化の多様性が強調されたのである²¹⁾。

²⁰⁾ オルティスは、*Sobrados e mucambos: decadência do patriarcado rural e desenvolvimento do urbano*. (Freyre, Gilberto, 1936. São Paulo: Companhia Editora Nacional.)を言及。

²¹⁾ ギアンナ (Hermano Vianna) は、「調和のイデオロギー」ともいえるフレイレ的思考を示すのに「フレイレ的視点」という表現を用い、フレイレが国民文化論の形成に与えた影響力の大きさを示している (Vianna 1999)。

このような議論は、軍事政権下での連邦文化審議会 (Conselho Federal de Cultura)²²⁾でも引き継がれていく。

ヴァルガス期以降もナショナリズムのダイナミズムは衰えることなく、それどころか真正なブラジルの存在を証明するような巧妙な仕掛けも存在してきた。1950年代のブラジル高等研究所 (Instituto Superior de Estudos Brasileiros) の議論では、これまでブラジルは旧宗主国側によって文化をも支配されてきたのであり、真正なブラジル文化は「隠蔽」されてきたと主張された。その探求には植民地的状況から抜け出す必要があり、それは開発によって可能であるとされた。こうしてブラジリダーデの問題は当時の政府の開発主義と結合され、目に見える形で実践されていったのである²³⁾。

1964年以降の軍事政権下では、テレビや新聞、通信手段などのマスコミュニケーションの急速な発達により、ネーション像がブラジル全土へ伝播され、遠く離れた人々の間で共有されることとなった²⁴⁾。

こうして、ナショナリズムは20世紀を通じて、多大なる影響力をブラジル社会全体に及ぼしてきたのである。

²²⁾ 1966年にブランコ (Castelo Branco) 大統領によって創設され、伝統的な知識人から構成されていた。フレイレもメンバーの一員であった。

²³⁾ クビシェッキ (Juscelino Kubitschek) 大統領による、メタス計画の実施、新首都ブラジリア建設等が挙げられる。

²⁴⁾ マスコミュニケーションの整備を進めたのは、ほかならぬ軍事政権であった。当時、国外の敵よりも内なる敵を最も懸念していた軍事政権にとって、公共空間を統合することが急務であったからである。ブラジルでは、1950年に国営放送が始まり、1964年には通信省 (Ministério das Telecomunicações) が創設され、1965年にはブラジル通信企業 (Empresa Brasileira de Telecomunicações) が全国放送を開始した。ブラジル映画社 (Empresa Brasileira de Filmes)、国立芸術財団 (Fundação Nacional das Artes)、グローボ (TV Globo) などが登場し、「文化の行政」(Ortiz 1985:78) として動き出したのもこの時期である。

3. リオグランデスル州における「ブラジリダーデ」の主張

(i) 地域主義運動の勃発

ナショナリズムの進展は、地域的な多様性をネーションとの関係において問うこととなる。オーヴェンは近代主義者の近代化とブラジリダーデの議論に注目する。近代主義者は、西欧に対するブラジルの文明化や普遍化にはナショナルなもの創造が不可欠と主張する一方、地域主義は統合の障害として否定した。例えば、詩人・小説家のマリオ・デ・アンドラーデ (Mário de Andrade) は、詩人カルロス・ドゥルモン・デ・アンドラーデ (Carlos Drummond de Andrade) にあてた手紙の中で、次のように述べたという。

我々は理想的なアイデンティティ、つまりブラジルの傾向を創造したときに、文明化との関係において文明化されるだろう。そうすることで、模倣の段階から創造の段階へと移行することができるのである。そして我々は普遍的となるのである、なぜなら我々はナショナルな存在となったからである (Oliven 1992:33)。

ところがこうした動きに対し、モダニズム運動はむしろ開催地となったサンパウロの「地方偏愛主義 (bairrismo)」にすぎないとして、長い歴史を有する北東部の最大の都市の一つである、ペルナンブーコ州のレシーフェで地域主義運動²⁵⁾が起こった。

この地域主義運動の代表者であったのが、フレイレである。フレイレは1926年に『地域主義宣言 *Manifesto regionalista*』を出し、モダニズム運動の中で軽視され始めた地域とその伝統の価値の保存を訴えた²⁶⁾。

²⁵⁾ ブラジルにおいて、「地域主義 (regionalismo)」は、ナショナリズムと同様、政治的、経済的、文化的であるなどとして、定義が難しい。

²⁶⁾ このマニフェストが、実際に出版されたのは50年後の

と同時に、「我々の運動は、ブラジルのために、新たな組織化を示唆することにほかならない」(Freyre 1976:55)²⁷⁾と述べ、「ネーションの概念において欠かせない要素として地域を捉え、それに基づいた政治的、行政的モデルを通じて、ブラジル社会を確立することを目的とした、再組織化の提案」(Oliven 1992:34)を行った。

ブラジル社会の再組織化の必要性が唱えられたのは、海外特に北米の文化的な悪影響が懸念されたためである。それを最も良く体现しているのが、モダニズム運動の中心地であるサンパウロや西欧的な文化を追従してきた首都リオデジャネイロであると考えられた。

ここで注目すべきことは、フレイレが単に「差異」や「分離」を強調してはいないという点である。それどころか、彼らの地域主義運動が分離主義や地方偏愛主義と混同されることを危惧していた(Freyre 1976:54)。

フレイレは、「ブラジル」を構成する重要な要素として、地域的な価値を訴えたのである。このレシーフェで起きた地域主義運動はむしろ真正なブラジルを求める動きから生じたといえる。つまり、真正なブラジルの「存在」に対して疑問を投げかけたものではなく、多様性とブラジリダーデ間の関係を問い、両者間の調和を図る試みであったといえる。

(ii) 分離主義的要素の否定とポルトガル性の肯定

この地域主義宣言の4年後、リオグランデスル州サンボルジャの出身のヴァルガスが、国家統合と再中央集権化の建設者として、中央政府の檜舞台に登場した。このような背景もさることながら、州の牧畜業と干し肉産業が国内市

場向けであったこと、ナショナリゼーション政策の進展により、「特異な」リオグランデスル州においても、ブラジルへの統合やブラジリダーデに関する議論が積極的に行われるようになる。1935年、1937年と1940年には、リオグランデスル歴史地理学会(Congresso de História e Geografia Sul-Rio-Grandense)が開催され、州の歴史が再考された²⁸⁾。

州のブラジリダーデを示すうえで、最も重要なのは、ファラッポスの乱の再解釈による、州の分離主義的要素の否定である。これは、乱の100周年にあたる1935年に開催された第1回リオグランデスル歴史地理学会の主要テーマでもあった。

例えば、1923年のバルセロス(Ruben de Barcellos)の『分離主義イデオロギーとリオグランデスルの特性 *A ideologia separatista e o caráter rio-grandense*』では以下のような記述がなされている。

革命家たちは共和国を望んでいた、それを達成するための偶発的手段として分離を受け止めていた。記憶に残るエピソードの指揮者たちは、ナショナル・アイデンティティの感情を失うことはなかった(Oliven 1992:57)²⁹⁾。

リオグランデスル州の下院議員であったルッソマーノ(Victor Russomano)は、1935年9月20日にリオデジャネイロでの市民セッションで、次のように公言したという。

(ファラッポスの乱は)ブラジリダーデの確立を目指す、燃えるような願望であり、ガウショの愛国心であり、ブラジル人であることを

1976年である。

²⁷⁾ 傍点は筆者による。

²⁸⁾ リオグランデスル歴史地理学会での議論は『紀要 *Anais*』にまとめられている。紀要の内容を研究したものとして、Oliven 1992、Torres 1995 等がある。

²⁹⁾ 傍点は筆者による。

示し、州の連合で結びついたブラジリアン・コミュニティの中で生きたいという告白であった(…)ああ、私のブラジル人リオグランデよ、ブラジルのために我々は闘ったのであり、今日も、そして明日も闘うのである (Oliven 1992:57-58)。

同様に否定されるべき要素であったのは、リオグランデドスルの「ラプラタ性 (platinismo)」、すなわちアルゼンチンやウルグアイとの類似性である。他州に居住するブラジル人の多くにとって、ガウーショはブラジル人ではなくスペイン系アメリカ人であり、ヴァルガスはカウディーリョである。フレイレは、ヴァルガスを以下のように表現した。

最近ブラジルは、ラテン・アメリカ的革命ではなくて、大統領の非業の死、それも自殺で世界を驚かせたことは事実である。ゼトゥリオ・ヴァルガスの自殺は、どちらかといえばブラジルにふさわしくない事件であると考えられよう。このことは、彼は、その精神や感覚においては、全くブラジルのであったにもかかわらず、あまりにもスペイン系アメリカの近くで生まれ育ったために、スペイン系アメリカでなされる或る種の過激な政治活動の方法に影響されたもの、と説明されよう (フレイレ 1979:17)。

こうした解釈に対し、リオグランデドスル州出身で地域主義文学者としても有名なヴェリッシモ (Erico Veríssimo) は、州の人々を次のように表現し反論した。

我々はフロンティアそのものである。18世紀にポルトガルとスペインがこの広大な地をめぐって争っていたとき、我々はポルトガルに属するか、スペインに属するかの決断を下さ

なければならなかった。我々は大いに苦しみ、血を流してブラジルの最南端に残ることに決めたのである。そんな我々をスペイン的としてどうして非難できようか (Oliven 1992:48)。

ゴラール (Jorge Sallis Goulart) は、リオグランデドスルのガウーショとラプラタ諸国のガウーショ (gaucho) の差異を強調する。

「悪い」ガウーショは、ラプラタのパンパの創造物である。戦いを好むというだけで戦うという、独特であるこの種は、社会と正義の永久なる敵であり、不屈で冒険好きの戦士であり、賭け事の悪癖を持ち、残酷な争いを好み、パンパの無名のヒーローである。これはカステリーリャに独自のものである。リオグランデドスルは違う。節度をわきまえ、規則正しいが、自分の社会組織を守るためには、敵に立ち向かうことも恐れない。ラプラタの歴史における一連の残虐な出来事は、リオグランデドスルの歴史には全く無縁なものである。(…)ラプラタのガウーショは、社会とその社会の法に対し反抗する。最高権威に達したカウディーリョは、公益を目的としない。そもそもそれを理解していないからである。全ての特権は、粗野な独裁者の人格にある。リオグランデドスルの人々は正反対である。(18)35年、民衆の必要に応え、その土地を最も信頼しうる政府に与えるため、彼らは立ちあがった (Oliven 1992:55-56)。

こうしてラプラタ諸国との差異を示すことによって、彼らとの関係は最小化され、州の歴史はブラジルへと向けられたのである。そしてこの方向付けは、リオグランデドスル州の「ポルトガルのブラジル性 (luso-brasileirismo)」の肯定へと繋がっていく。その際、州の歴史にお

けるポルトガル・アソーレス移民の貢献、17世紀にサンパウロからリオグランデドスルにやって来た奥地探検隊、バンデイランテスの「偉業」が積極的に賞賛された。

アソーレス移民の偉業を賞賛する際には、ある特徴がみられる。例えば、ポルト・アレグレ (Achylls Porto Alegre) の1919年の記述に、それを見ることができる。

リオグランデドスルには、アソーレス人が来るまでは、守備隊内に、サンパウロやポルトガル本土からきた独身者がいただけであった。彼らは先住民が生産したマンジオッカ、とうもろこしやかぼちゃで生活する日が多かった、とあってよかった。そこへアソーレス島から、よい習慣と労働力を持ってきて、ヨーロッパと同じような食糧と衣服と住宅をもつ新しい農村社会をつくった。これは疑いもなく、リオグランデの人と社会の基礎をつくったものであり、われわれの祖先である。彼らは身心ともに強健で、彼らの夢であった理想の地に、郷里と同じような、果実と花にみちた社会をつくった(サンパウロ人文科学研究会 1963:25)。

つまり、1748年に初めて家族移民という形で入植したアソーレス移民をリオグランデドスル社会の基盤を形成した人々とみなすことにより、この地域のポルトガル起源を主張するのである³⁰⁾。

バンデイランテスは、1940年の第3回リオグランデドスル歴史地理学会でも議論された。ナショナルな精神は彼らとともにやって来たのであり、ドゥアルテ (Manuel Duarte) が「ナショナルリズムに先んじた、ナショナルリティの前衛者」として、カルダス (Jací Caldas) は彼らの「領土

獲得の偉業」を評価した (Torres 1995:244)。

ポルトガルのブラジル性の肯定も、スペイン系アメリカ諸国という否定すべき対立項の存在があって、成立しているといえる。

(iii) 「ガウーショ・ブラジレイロ」の確立

上記のような歴史解釈において、スペイン系アメリカ世界を前にした、ガウーショの勇敢さが述べられ、「国境防衛者」としてリオグランデドスルの人々が描かれていることに気付く。

リオグランデドスルの地政学的な位置は、同州に「フロンティア」のイメージを与える。オリヴェンも、ガウーショの言説のなかで度々あらわれる要素は、州のフロンティア的特徴、州の行った選択(ブラジルへの帰属) 州の払った代償(領土紛争による犠牲) 等であると指摘している (Oliven 1992:49)。

国境防衛者となったことでリオグランデドスル州は、ブラジル国史の中に自らの姿を確認し、リオグランデドスル州出身のブラジル人として、すなわち「ガウーショ・ブラジレイロ (gaúcho brasileiro)」としてのアイデンティティを確立した。

このような「ガウーショ」と「ブラジレイロ」の接合は、国家統合が進展し始めた1920年代以降、特に政治的、歴史的言説の中で増加する³¹⁾。グツフレンドによれば、1920年から70年は「ガウーショ・ブラジレイロの神話形成期」(Gutfreind 1992:148) である³²⁾。

³¹⁾ 例えば、「ガウーショ・ブラジレイロの起源 (Gênese do gaúcho brasileiro)」、「リオグランデの軍事要塞、ガウーショ・ブラジレイロの歴史的発祥地 (O presídio militar de Rio Grande, berço histórico do gaúcho brasileiro)」、「(Gutfreind 1992:152)」、「リオグランデドスル、国境の番人 (Rio Grande do Sul, sentinela da fronteira)」、「ガウーショ社会、真なる野営軍隊 (sociedade gaúcha, verdadeiro acampamento militar)」、「リオグランデドスル、ネーションの建設者 (Rio Grande do Sul, construtor da nação)」、「(Pesavento 1993:388) といった表現が挙げられる。

³²⁾ モダニズム運動が始まった1920年代と、軍政から民

³⁰⁾ リオグランデドスルの州庁舎の前にはアソーレス移民を称える像が立っている。

この神話形成期において、リオグランデスル州の知識人は、州のブラジリダーデを示そうと積極的に試みた。それは、フレイレ的な手法、言い換えるなら、対立的な要素を排除し、かつ「ポジティブな面」(Oliven 1992:58)を強調することで行われた。こうして、地域がネーションの一構成要素へと変化することで、フレイレが地域主義運動の目的とした「ブラジルのための新しい組織化」が達成されたといえよう。

だが、「国境」そのものが歴史の産物であるというペサヴェント (Sandra Jatthy Pesavento) の指摘も見逃すことができない (Pesavento 1993:386)。しかも、オリヴェンが指摘するように、このフロンティアは、ブラジルの端としてか、または、他の国に属した地域として捉えることも可能なのである (Oliven 1992:48)。

結びに代えて

ブラジルでは、ブラジリダーデの存在が絶対視されると同時に、「多様性の中の統一」が試みられてきた。

前山も指摘しているように、ブラジルでは、多種多様な人種、文化の接触、融合の結果形成された基層文化の存在とそれによる国の統一がまず主張されるが、多様性もまた富みの源泉として謳われてきた (前山 1984)。筆者も、1996年2月から1997年3月のブラジル滞在中に、「ブラジルは混ざり合った国だ (O Brasil é uma mistura)」と「ブラジルには何でも有りなのさ (O Brasil tem tudo)」という表現を耳にした。前者が混血のブラジル像を言及しているのに対して、後者では、ブラジルを構成する多様性が謳われている。

こうしたことが可能であるのは、ブラジルのナ

ショナリズムの展開において重要な役割を担ってきた、「混淆」の概念の二重性に起因していると思われる。レッサー (Jefferey Lesser) も指摘しているように、混淆の概念は多くの研究者が捉えてきたような多様な人種の融合の結果としての新しい人種の誕生を意味するだけでなく、異なるアイデンティティが接合したものとして、つまり単一で一様というよりもハイフンつきのブラジル人の創造とも捉えることができる (Lesser 1999:5)³³⁾。ハイフンつきのブラジル人も、「特定の文化遺産をふまえたブラジル人であることの一つの在り方」(前山 1984:488)に過ぎない。つまり、ブラジルにみられるのは「排除」ではなく、むしろ多様な人々を「包含」していくようなネーション像であり、そこにブラジルのナショナリズムが持つ強靱さが潜んでいるのではないだろう³⁴⁾。

しかし、多様な人々の基層を成すとされるブラジリダーデは明確に示されることはない。リオグランデスル州の知識人の言説からも気付くように、州の異質性といわれるものが否定されるだけで、州が自らを投企する³⁵⁾「ブラジル」そのものは、あまり明確な姿を見せていない。

しかし、真正なブラジルの存在が絶対視されている以上、その曖昧さがブラジリダーデを操作する余地を生じさせ、これにフレイレ的な手法が加わることで、多民族多文化社会であるブラジルにおいても、あらゆる角度から「調和した」一社会の想像や創造がなされてきたのであ

³³⁾ 連邦文化審議会においても、混淆は「異種性」の概念として捉え直された。

³⁴⁾ 「多様性の中の統一」も「統一」のほうに強調が置かれており、国家統合を目的とする政治権力の存在を無視することはできない。

³⁵⁾ 酒井と米谷によれば、「投企」とは、各々が絶えず変化していくことで、実はどこにも存在しない「国民的な主体」に対し各々が働きかけるという行為である。同化とは別の、多様な民族を包摂し統合する在り方として提示された (酒井・米谷 1998)。

主義への移行期の1970年代を時代区分の目安としたと思われる。

る。だが、それも想像のレベルでしか存在しえない世界である。

今日、ブラジルで最初のナショナリスト知識人世代が登場してから一世紀が経ち、我々は、20世紀から21世紀へという新たな世紀の転換期を迎えている。ブラジリダーデへの関心が未だみられる一方³⁶⁾、グローバル化の進展は、これまでの国境を無意味なものに変化させつつある。また、1995年のメルコスルの発足は、これまで問われてきた「国家」と「地域」に加え、「ラテンアメリカ」という新たな枠組みを住民のアイデンティティ形成のプロセスに付け加えている。広義の意味での「地域」概念が揺らぎ、混沌とした現代における、人々のアイデンティティの行き着く先はまだみえない。

本稿は、上智大学大学院提出修士論文に大幅に加筆、修正を加えたものである。また、平成12年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

参考文献

アンダーソン、ベネディクト 1997. 『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』（白石さや・白石隆訳）NTT出版。

Costa, Elmar Bones da (ed.). 1998. *História ilustrada do Rio Grande do Sul*. Porto Alegre: Já Editores.

Flores, Moacyr. 1996. *História do Rio Grande do Sul*. Porto Alegre: Nova Dimensão.

Freyre, Gilberto. 1978. *Casa-grande e sen-*

zala. Rio de Janeiro: Liv. José Olympio, 19^a edição. [初版は1933年]

———. 1976. *Manifesto regionalista*. Recife: Instituto Joaquim Nabuco de Pesquisas Sociais.

フレイレ、ジルベルト 1979. 『熱帯の新世界——ブラジル文化論の発見——』（松本幹雄訳）新世界研究所。

Gutfreind, Ieda. 1992. A historiografia sul-riograndense e o mito do gaúcho brasileiro. In Sergius Gonzaga and Luís Augusto Fischer, coords. *Nós, os gaúchos*. Pp.148-152. Porto Alegre: Editora da Universidade.

Hutchinson, John. 1987. *The Dynamics of Cultural Nationalism: the Gaelic Revival and the Creation of the Irish Nation State*. London: Allen & Unwin.

Lauerhass Júnior, Ludwig. 1986. *Getúlio Vargas e o triunfo do nacionalismo brasileiro*. Belo Horizonte: Itatiaia.

Leal, Ondina Fachel. 1989. The Gauchos: Male Culture and Identity in the Pampas. Doctoral dissertation in anthropology, University of California, Berkley.

Leite, Dante Moreira. 1992. *O caráter nacional brasileiro: história de uma ideologia*. São Paulo: Editora Ática, 5^a edição. [初版は1954年]

Lesser, Jeffrey. 1999. *Negotiating National Identity: Immigrants, Minorities, and the Struggle for Ethnicity in Brazil*. Durham: Duke University Press.

Lopes, Kimberle S. 1998. Modernismo and the Ambivalence of the Postcolonial Experience: Cannibalism, Primitivism and Exoticism in Mário de Andrade's *Macunaíma*.

³⁶⁾ 例えば、1998年のブラジル映画で、同年のベルリン国際映画祭の金熊賞など数々の国際賞を受けたことでも知られる『セントラル・ステーション *Central do Brasil*』は、少年と初老の女性の旅を通じて、ブラジル領土の広大さとそこに住む人々の多様性が描き出される一方で、「ブラジル」の探求が一つのテーマであった。

- Luso-Brazilian Review* 35(1):25-88.
- Love, Joseph L. 1971. *Rio Grande do Sul and Brazilian Regionalism 1882-1930*. Stanford: Stanford University Press.
- 前山 隆 1984. 「ブラジル社会——人種と文化のつぼ? ——」大貫良夫編『民族交錯のアメリカ大陸』457-492 頁、山川出版社。
- 三田千代子 1988. 「熱帯のルーズ・ブラジル文化」『ソフィア』37(2):187-198.
- . 1999. 「ブラジルとヨーロッパ思想——悲観論からナショナル・アイデンティティの形成へ」嶺山道雄・中村雅治編『新しいヨーロッパ像をもとめて』165-184 頁、同文館。
- Nava, Carmen. 1998. Lessons in Patriotism and Good Citizenship: National Identity and Nationalism in Public Schools During the Vargas Administration, 1937-1945. *Luso-Brazilian Review* 35(1):39-63.
- Needell, Jeffrey D. 1999. The Domestic Civilizing Mission: The Cultural Role of the State in Brazil, 1808-1930. *Luso-Brazilian Review* 36(1):1-18.
- Oliven, Ruben George. 1984. The Production and Consumption of Culture in Brazil. *Latin American Perspectives* 11(1):103-115.
- . 1986. State and Culture in Brazil. *Studies in Latin American Popular Culture* 5:180-185.
- . 1992. *A parte e o tudo: a diversidade cultural no Brasil-nação*. Petrópolis: Vozes.
- オランダ、S. B. デ 1993. 『ブラジル人とは何か——ブラジル国民性の研究——』(宮川健二訳)新世界研究所。
- Ortiz, Renato. 1985. *Cultura brasileira e identidade nacional*. São Paulo: Editora Brasiliense.
- Pesavento, Sandra Jatahy. 1993. A invenção da sociedade gaúcha. *Ensaio FEE* 14(2):383-396.
- . 1995. Região e nação: as releituras do Brasil em tempo de democracia. *Humanas* 18, (1/2):109-119.
- ペスカテロ、アン 1970. 『20世紀ブラジルにおけるナショナリズムの予備的研究：定義とその現われ方の発展』(村江四郎訳)上智大学イベロ・アメリカ研究所。
- Reis, José Carlos. 1999. *As identidades do Brasil: de Varnhagem a FHC*. Rio de Janeiro: Editora FGV.
- Ribeiro, Darcy. 1995. *O povo brasileiro: a formação e o sentido do Brasil*. São Paulo: Companhia das Letras.
- Rowe, William and Vivian Schelling. 1991. *Memory and Modernity: Popular Culture in Latin America*. London: Verso.
- 酒井直樹・ブレット・ド・バリー・伊豫谷登士翁 編 1996. 『ナショナル・アイデンティティの脱構築』柏書房。
- 酒井直樹・米谷匡史 1998. 「<帝国>批判の視座」情況出版編集部編『ナショナリズムを読む』156-174 頁、情況出版。
- サンパウロ人文科学研究会編 1963. 『南リオ・グランデの社会と産業』サンパウロ人文科学研究会。
- Santos, Afonso Carlos Marques dos. 1985. A invenção do Brasil: um problema nacional? *Revista de Historia* 118:3-12.
- Skidmore, Thomas E. 1994. *O Brasil visto de fora*. Rio de Janeiro: Paz e Terra.
- . 1999. *Brazil: Five Centuries of Change*. Oxford: Oxford University Press.
- Torres, Luis Henrique. 1995. O Rio Grande do

Sul e a identidade nacional: os congressos de história e geografia (1935-40). *Biblos* 7:241-248.

Vianna, Hermano. 1999. *The Mystery of Samba: Popular Music and National Identity in Brazil*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.

Wagley, Charles. 1979. Anthropology and Brazilian National Identity. In Maxine L. Margolis and William E. Carter, eds. *Brazil, Anthropological Perspectives*. Pp.1-18. New York: Columbia University Press.

Weinstein, Barbara. 1982. Brazilian Regionalism. *Latin American Research Review* 17(2):262-276.